コソボの戦火の中、治療継続できず

難病の3歳ぼうや 早く元気な笑顔を

眼内にがんができる難病の網膜芽細胞腫（もうまくがさいぼうしゅ）に苦しみながらも、コソボ紛争による空爆で、治療中断を余儀なくされた三歳の男児が七月上旬にも来日し、金沢大学病院（金沢市）で治療を受けることになった。現地で医療活動を続ける日本人医師らの呼びかけで、日本国内でも、関係者が「ネジール君を救う会」を結成、医療や滞在費の募金活動を開始する。

金沢大病院受け入れへ

日本人医師ら呼びかけ 募金活動開始

ユーゴスラビア・コソボ自治州のアルバニア系住民、アブディラマン・シニックさん(四〇)の長男、ネジールちゃん(三つ)。

AMDA（アジア医師連絡協議会）を通じて、ネジールちゃんの窮状を知った日本アルバニア協会事務局長の片山直樹さん(四一)＝金沢市城南＝らによると、ネジールちゃんは、空爆の始まる一カ月半前、網膜芽細胞腫と診断され、三月三日に右目の摘出手術を受けて義眼となった。三月中旬には抗がん剤治療を開始したが、その後、NATO軍による空爆が激化して治療の継続が困難になった。

ネジールちゃんは四月二十日に治療のため、首都ベオグラード市内の病院に入院する予定だったが、コソボからベオグラードへ向かう途中の検問所通過を三度にわたって拒否され、治療が受けられないまま現在に至っている。

AMDAから派遣され、先月からアルバニアで医療救援活動にあたっている医師の上田明彦さん(三二)が、今月中旬、片山さんとともにコソボ自治州に入り、ネジールちゃんの病状を詳しく診察した。

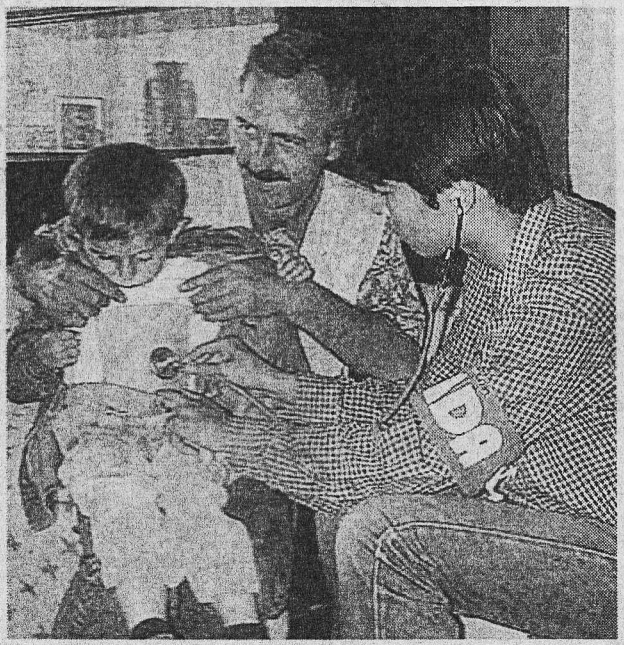
上田さんによると、現在もコソボからベオグラードへ入るのは埋設された地雷などのために危険な状態で、ネジールちゃんがベオグラードの病院に入院するのは空爆終了後も事実上、不可能な状態。

一方、コソボには小児がんの専門医がいないことから、ネジールちゃんは治療を受けることができず、がん再発のおそれが高くなるという。このため、上田さんはAMDAや日本アルバニア協会を通じ、国外での治療の受け入れ先を探していた。

片山さんの地元の金沢大学病院が、ネジールちゃんの受け入れを了承したことから、片山さんがネジールちゃん一家を自宅に引き受け、治療を受けることになった。

ネジールちゃんの治療にあたる金沢大病院では、現在、取り寄せた英訳のカルテをもとに、小児科、眼科を中心とした受け入れ態勢を整えている。

渡辺洋宇病院長は「今のところ、脳内転移はないと聞いているが、ネジールちゃんは進行性がんであるため、抗がん剤治療を早急に始めなければならない。全科をあげて治療に全力を尽くしたい」と話している。



父親のシニックさんに抱かれ、上田医師の診察を受けるネジールちゃん＝ユーゴスラビア・コソボ自治州（AMDA提供）

網膜芽細胞腫　子どもの眼内に起こる悪性腫瘍。一般的に摘出手術後、一カ月に一度のサイクルで一年間、抗がん剤治療が必要とされる。